

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジョット (12)

訳：渡 辺 弘
立 川 順 子

第12章 生来の貴族主義者の政治学

バジョットほどその精神的父に対して不敬な著述家も恐らくいなかったであろう。彼が政治学に関して書いた殆ど全てのものは、辛辣で批判的である。彼は実際的な政治家として偉大なホイッグ党員（パークのこと。彼は1794年まで下院議員としてホイッグ党の有力な指導者であった：訳註）よりも小ピットの方をほめそやしたのは当然であったが、パークがいかに実際的な政治家以上の存在であったかを述べるのを怠った¹⁾。彼は過度に熱狂的な党人の一例として後者（パーク）を引用している——

これほど動機が哲学的な人もいない。だが、党とともに行動する者でその援助でさらに先へ進んだり、それを擁護してより過激であった者は一人もいなかった。彼は政敵の主義に対して何を言うべきか忘れていた。彼の想像力は、その政敵をその主義の化身と化してしまった¹⁾。

この評価には多くの鋭さと正当性が含まれている。確かにパークは滑稽な自己宣伝癖とただごとでない無分別な言動、重大な判断の誤ち、決定的な道德上の過失という罪すら犯していた。しばしば彼は狂信の人間のような振舞をした。彼は単にその熱情のみならず、真理それ自体に我を忘れた。したがって、その公にされた名演説の証拠に基づいて言うなら、彼は哲学者としては常に第一級に位置するにちがいないが、政客・政治家としては、バジョットの洞察のとおり、二流の地位にしか値しない。彼の生涯は、壮大な悲劇的スペクタクルを表現し

ているが、それは普遍的天分の崇高さと過度に英雄的性格が情熱的で感傷的なアイルランド人（バークのこと：訳註）の喜劇的要素によって軽減されている種類のものである。

バジヨットの敵意がいかにも彼らしいのは言うまでもない。彼はバークが英雄であるからといって、彼を英雄崇拜することは出来なかった。平凡な時代に存在し、退屈な世間でこつこつ働いている人間の誰が真に英雄であったらうか。彼の挫折の全ては、冷やかなまでの弱点の乏しさではなく、見事なほどの長所の横溢に起因していたと言ってもよかった。彼の言葉と行動の全てには、常に変らぬ感情の深さと激烈さ、人格の重量感、洞察の高遠さと純粹さがあった。彼は終幕が降りたあとも奇妙にも先へ進み続け、真価を認める者もない世間で果てしもなく堂々とした役を演じている、一種の悲劇の主人公であった。彼の偉大な演説は、われわれにハムレットの独白とオセロの激情を想起させる。下院は聞く耳をもたなかったが、それは天使達が耳を傾けるであろうようなものであった。彼の哲学はユリシーズの弓にもたとえられるものであった。二流の人物にはそれを曲げることは出来なかったであろう。その論理的帰結に至るまでを狭く、表面的にはあるが分析してみると、矛盾だらけであるように思われる。だが、バーク流の考えでは、それは最高の知恵のように思われる。もしシェークスピアが政治哲学者であったら、彼は恐らくバークのような政治哲学者となっていたであろう。

そしてバークが1850年に活躍していたなら、バジヨットは決して彼に投票はしなかったであろう。バジヨットは政務とは退屈なものであり、退屈な人間によって最もうまく管理されるという確固とした確信を抱いていた。彼はサー・ジョージ・コーンウォール・ルイスの意見に賛同を示し、インテリを賢明にも疑った。しかしながら、彼の哲学はバークのそれに非常に似ていたために、後者が保守主義の韻文と称されるとしたら、バジヨットは保守主義の散文と呼ばれるであろう。

両者の政治研究のアプローチの仕方は、多くの点で同一である。両者共に事実を絶えず観察すること、常に思想を現実には当てはめるべきであることを主張

している。共に普遍的原理を宣言することを嫌っている。二、三の半面の真理から全般的理論を推論したり、論理的真空から手の込んだ空論を生み出すような抽象的で先験的なタイプの論証を嫌悪している。「私は人間を観察し、事物を観察しなければならない」とバークは叫んでいる。「私は断じて自制などしない。理性的人間は抽象的観念や一般概念によって自制したことは全くなかった……状況を考慮に入れない人間は、誤っているのではなく、全く常軌を逸しているのである——すなわち彼は形而上学的に狂っているのである」²⁾。

独自の原則を探求することほど（バジョットの記すところによれば）退屈なものはない——それらを苦勞して案出することほど楽しいものはない。熟考したことのある者は、探求することが苦痛であることを知っている。臆病にも暗闇でつまづく子供が、日の当たる芝生に遊ぶ同じ子供と異ならないのは、洗練されていない仮説を模索したり、ためらったり、疑念を抱いたり、つまずいたりする哲学者が、自己の確固とした確信といういくつかの結果を誇らしげに演繹し、見解を述べる同じ哲学者と変わらないのと同様である。この理由のゆえに、数学は知性の楽園と称されてきた……英国における主知哲学の創始者であるベーコンを精読すれば、『学問の進歩』(*Advancement of Learning*)のページはことごとく、人間の知性がたちまちのうちに限られた不完全に観察された各論から最終的概論を唱えたがる傾向に対する、一貫した警告にすぎないのが分かるであろう³⁾。

バジョットは単に包括的概論のみならず、軽率な推論をも非難している。彼はまた、「道徳のないし政治の問題に関して、普遍的なことが合理的に主張されることは全くありえない」というバークの言葉をも信じている。

バークは……政治が時間と空間の中で成されるものであるということ、制度とは変化するものであり、有為転変する世界の変わりゆく状態によって試され、適応されるべきものであるということ、実際のところ、政治は実務の一部分にすぎず、全ての事例においてその事例の切迫した事情によって、すなわち平たく言えば、分別と状況によって決定されるべきであることを最初に世間全般に教えたのであった³⁾。

手短かに言えば、両作家は共に政治には科学的普遍性や厳密さは不可能であるというアリストテレスの見解に意見を同じくしたのであった。一切の普遍的法則、数学の公式、政治学がありえない。『自然科学と政治学』はバジョットが後年、逆の考えに立ち至ったということを示すように思われるかもしれない。

そして事実、彼は人間社会を大そう控え目にはあるが、生物学的法則の観点から説明しようとした。社会は、彼の主張によれば、無限に複雑である——「抽象的定義を是認する国民は存在しない。国民は全て多くの特質と多面性をもった生き物である。一つの原則を正確に例証しえる歴史的事件は皆無である。全ての原因は、それ以外の多くのものことからみ合い、取り囲まれているからである」³⁾。自然淘汰説は人間の諸現象をどちらかと言えば概括的、皮相的にのみ説明出来るにすぎない。それは物理的原因の仕組みは解説出来るが、道徳的原因に関しては不可能であり、道徳的原因が物理的原因を作り出しているのである。道徳的エネルギーの保存の法則は存在しない³⁾。

『パークの政治哲学』(*The Political Philosophy of Burke*) という卓越した書の中で、マッカン教授 (MacCunn) は偉大な政治家について次のように述べている——

彼の著書のページを読み進む者はきまって、彼の思想は彼が当然とみなす種々の確信に深い影響を受けていると気付くようになる。それらの確信のいくつかは心理学的なものであり、いくつかは形而上学的なものである。人間は『宗教的な動物』であり、同様に『政治的な動物』である。全ての凡人は感情、習慣、偏見でさえも、理性よりも強くなりがちな生きものであるということ、人間は理論よりもその関心に比例している動機に基づいて行動することがはるかに多いということ、治療法を見つけるよりも不平を述べる方がずっと速いということ——これらは彼の説く心理学の原則のうちいくつかである。彼はそれらを証明することはしない。彼はそれらを証明することが自分に要求されていると感じていない⁴⁾。

だが、彼はそれらを証明する必要があるのであろうか。そのような信念は確かに科学的証明が不可能である。それらのものは実験室で試されたり、統計で立証されたりは出来ない。しかしながら、それらは単なる仮説にすぎないものではない。それらは人間の経験によって実証される。何故なら、それらは人間の最も健全な道徳と宗教的伝統の基盤に存し、幾多の世紀を経てきたその所産が、ちょうど見かけ倒しの哲学の所産が悲惨さと墮落であったように、一般的には幸福と徳であるからである。

バジヨットは、バークと同様に、はるかに形而上学的であることが明白な他のいくつかの概念に対してのみならず、このような心理学的教義をも支持している。両者共に完全で全能なる神と神の摂理を信じている。この問題に関するバークの思想は、バジヨットのそれよりもさらに深く、はるかに精密である。ある意味では、全ての主題のうちで最も世俗的なものである政治学を、彼は非世俗的な見地より考察した。彼がこれほど熱心に労働し、これほど情熱的に格闘したこの密接な俗世間を彼は結局のところ、測り知れないほど大きな非物質的現実を寄切る、つかの間の影にすぎないと考えた。彼の態度は根本的には宗教的である。その中心には、輝かしい道徳的想像力とキリスト教的謙遜という奥深い精神があった。われわれの本性における有徳なるものは全て神から生じ、弱いものはことごとく、われわれの固有の弱さから生じると彼は信じていた。われわれは永遠に前者に対して感謝し、後者に警戒するよう努めねばならない。神は善なるものであられた——「われわれの本性を徳によって完全なものとなるようにされた方は、さらにその完成に必要な手段をも遺贈された。彼はそれゆえに国家を遺贈された。すなわち、完成されたもの全ての源であり、原型であるものとわれわれの本性との結合を与えられた」⁹⁾と、バークは書いている。バークが政治的神秘主義者と称されるゆえんである。彼は真理よりも平和を好み、天国の鮮明で精密なイメージを形成することを危険視しているが、実際には過去に一種の世俗的天国を築いている。もし神が国家を遺贈されたのであるなら、彼はその形成に寄与する全ての道徳的努力——すなわち、全ての偉大で有徳な行為、全ての英雄的、模範的生活、全ての賢明なる法律、きわめてゆっくりと苦勞しつつ学ばれてゆく全ての倫理的、社会的習慣を遺贈されたのである。神の摂理の進展は、その局面の一つにおいて、社会の道徳的發展にほかならない。この教義に包含されている意味は明白である。ごく取るに足らない市民的義務でさえ、神聖な義務になる。法律は最も深い畏敬の対象、常に暗黙のうちに順守され——もし人間の弱さがそれに執着するように思われるなら——この上ない慎重さと敬虔さによってのみ変えられる対象となる。後年、バークは人間の内面の欠陥に大そう批判的になり、政府の外的形態を尊重するあまり、

何物をも全く変えたがらないように思われた。人は立派な人生を送るべきであり、神が定め給うたものを粗末に扱うべきではない。虐待と不正が存在するとしたら、それらはわれわれの罪に対する適切な懲らしめである。しかしながら、老齡からくる極度の慎重さにもかかわらず、彼が非現実的真理を多くの点で生き生きと効果的に日常の平凡な人生と結びつけようとしたのは、哲学者としてのパークの最大の長所の一つである。彼らしいことに、パークは教会と国家を単一の社会の単なる二つの面と考えている。この同一性は国立教会の中で具体化されるべきであると彼は感じた。

バジョットの方は、はるかに世俗的精神の持ち主である。彼は教会と国家がいかなる形にせよ密接に結びつくことに強く反対し、彼が明言していることの多くは、社会の神聖さと市民的義務の聖なる性格への信念を暗示しているが、これらの点については彼は多くを語らず、政治討論における彼の通常の調子は、明らかに俗人的である。その理由は様々である。彼は非常に雄弁というのではなかったし、恐らく彼は空ろな韻文よりも内容のある散文によってより効果的に実際の人間に強い影響を与えることが出来ると感じていたのであろう。人間は、キリスト教をあまりにも好奇心たっぷりに詮索すべきでないというのが、これまでわれわれが見てきたとおりに彼の原理の一つでもあった。最後に、彼の信仰は深く永続するものではあったが、パークの信仰ほど強烈で人を動かす力をもつものではなかった。彼は樂園についての夢想に悩まされることはなかった。

逆説抜きでパークについて書くことは不可能である。というのは、政治についての彼の根本的概念においてすらも、知者らしい矛盾とでも称されるものがあるように思われるからである。彼は国家を有機的組織体であり、『人為的』契約によって結合されている独立した個人から成る社会として述べている。彼は英国憲法を単なる人間の創り出した工夫であり、一種の神の啓示であると語っている。政治を単なる実務として、また、神聖なる哲学とみなしている。これらの矛盾は言うまでもなく解決されうる。人間は神の啓示を受け入れるのであるから、賢明に考案するのだと言えるかもしれない。パーク自身は幾たびか

国家が有機的組織体でもなければ、単なる個人の集合体でもないと言注意深く指摘してきた。人間の社会は生物学の法則にも形式論理学の法則にも服従させられることはない。しかし、バークはその理論の限界を認識していたように思われるが、それらを修正しようとはしなかった。むしろ、実際的な政治家のように、彼は抽象的理論の複雑さを避け、手近にある都合のよい原理をつかんで、半面の真理に半面の真理で向かう方を選んだ。愚行や誤謬が一方の極端に傾いたとき、彼は他方に傾斜した。表面的には彼は矛盾しているが、概して正義と中庸には忠実であり続けた。彼は正反対の真理を主張してきたが、それら正反対の真理の間に存する間隙を全て埋めることが出来るほど彼が度量の広い人間であったために、そのことは妥当であった。事実——この点は押しつけるべきではないが——バークの哲学の基盤には一連の原理というよりは、むしろ一連の支点があるのだと言えよう。論理の調和というよりは、魂のバランスがそこにはあるのである。

理論化に対するバークの嫌悪は、様々な原因から生じている。実際的な行動人であるので、彼は単なる概念には我慢がならなかった。彼はフランス革命の空虚で抽象的な理論化を嫌った。彼にはどこか神秘主義者めいたところがあり、生き生きとした真理を決まり文句という鉄の箱の中に閉じ込めるのを好まなかった。彼は不敬なる探求は多くの貴重な信仰を台なしにすると感じていた。とりわけ、彼は根本的原理と精密な体系に対して英国人らしい偏見を抱いていた。「フランス革命の考察」(“Reflections on the Revolution in France”)の中で、彼はプライス(Price, 1723-93. イギリスの非国教派の牧師。自然法思想に基づいて、アメリカに対する圧政を非難した：訳註)やプリーストリー(Priestley, 1733-1804. イギリスの化学者・非国教派の牧師。ルソーの影響を受け、いっさい政府干渉に反対した：訳註)のような数少ない英国の急進的理論家と大多数の保守的な英国臣民とを次のように対照している——

しだの茂みの下にいる5, 6匹のバッタは、そのうるさいリンリンという音でもって畑じゅうを鳴り響かせ、一方、ブリディッシュ・オークの影の下で休んでいる何千頭という牛は、反芻して戻したものをかみ、静かにしているからといって、騒ぎ

立てる者が畑の唯一の住人であるかどうか想像なさらぬようお願いしたい。勿論、彼らの数が多いとか、結局のところ、彼らは、大音量でがなり立てる、やっかいではあるが小さな丸まってやせた、ピョンピョン飛びはねる、一時的な昆虫以上のものだとはいえないでいただきたい⁹⁾。

バジヨットもイギリスの牛を時にいかめしく、時にふざけた調子で崇拜してきた。だが、パークのように、彼はその精神のバランスの見事さによって偶像崇拜の影響から保護されていた。彼は文芸理論において、時として極度に首尾一貫していないが——そして恐らくはパークよりもいっそう不埒にも——その根本的健全さを損なうことがないということを私はすでに説明した。政治学においては、彼は批判を招くことがはるかに少ない。「クーデターに関する書簡」と『自然科学と政治学』のいくつかの箇所は、国家についての世俗的見解を暗示し、『自然科学と政治学』の他の箇所が宗教的見解を暗示するように思われるのは事実である⁹⁾。ある時は彼は政治における探究的、合理的態度を奨励し、ある時にはそれに反対している。しかし、概して彼は無定見となるにはあまりに慎重である。彼は謹厳に眼前の事実を分析し、きわめて容易に、目立って無定見になりやすい、根本的原理という目もくらむような領域に身を投げるための踏切り板として、事実を使用することはめったにない。抽象的『体系』にこれほど満足しなかった19世紀の政治哲学者も稀である。われわれは『イギリス憲政論』をミルの『代議政治論』(*Representative Government*)と比較しさえすればよい。前者は事実分析という肉体と骨である。後者は対照的に理論という骸骨にすぎないように思われる。バジヨットは眼前の代議政治を分析している。ミルは全ての優れた代議政治に必要な本源的条件に到達する。明らかに、パークとほぼ同じ理由で、バジヨットは反啓蒙主義者となる傾向がある。

「クーデターに関する書簡」はバジヨットのより長編で、さらにいっそう知られた政治についての著作の最初のものである。それらはパークの思想を19世紀の政治状勢へ適用したものである。25才の人間の著作にしては、それらは非凡な出来である。これほど若年の人間が才気縦横の筆を見せたり、様々な思想を巧みに扱っているということは並はずれたことではないが、自分の眼前に展

開してゆく現実の状況の複雑さ、熱気、偏見を全て深く洞察していることはきわめて特筆すべきことである。私はすでにその状況については語り終えた。フランス共和国は恐怖で瀕死の状態にあった。誰もが革命を期待していた。貿易は行詰っていた。株式市場はすでに崩壊していた。人々はただ通りで話をし、ふるえるばかりであった。突如、共和国の大統領、ルイ・ナポレオンが政府を掌握し、過激論者を沈黙させた。最初の書簡で、バジョットは特に国民の意志が確かめられるまで、単に支配力を保持しようとするつもりにすぎないなら、大統領の行為は正当化されると主張した。だが、そのあと大統領は自らに事実上、絶対的権力を授ける憲法を発布した。大衆はそれを是認するように思われた。次の書簡において、バジョットは新たな協定に賛成の論陣を張ったが、その議論は二つの大きな概括的原理、すなわち、自己保存は社会の最初の法則であり、国の政府はその国民性に適合されるべきであるという原理に基づいていた。

バジョットと同様、バークに関しても、この中の最初のものの説明が殆ど不要の原理であった。文明は社会構造なしに存在しえず、その構造は幾多の世紀を経た限りない努力の結果である。王子—大統領(ルイ・ナポレオン)はつかの間の激情と暴力をして、時間のみが再建しえるものを破壊せしめなかった点で正当化された。

次の書簡で、バジョットはかなり無益にも矛盾した言説を述べた。1789年の革命はそれが過去の社会構造全体を破壊し、ナポレオン I 世の独創的天分のために邪魔物を取り除いたというまさにその理由のために、フランス国民にとっては測り知れない恩恵であった。全く不利にも論理を犠牲にして、そのあと彼はバークをよりどころにして、「政治が時間と空間から作られ」、「制度とは変わりゆくものであり、変転する世界の変化する諸状況によって試され、適応されるべきものである」⁷⁾と主張した。1848年の一連の事件(2月革命とそれに続く出来事: 訳註)は、これらの状況のうちで最も重要なものは国民性であると国民に教えていた。入念な憲法も、その法律が対象となる国民の気風(*700s*)、社会習慣、倫理的能力に生き生きと適合していなければ、大量の紙きれにすぎない。

バジヨットによれば、フランス人のような利発な国民は自治能力が全くないということになる。常に新たな思想を抱く人間は、不幸なことに、それらの思想を実行に移したいと思うものである。彼らは古い法律が不完全であると感じ、それらを廃止することを望む。彼らは毎週のように新しい統治者を欲し、毎月のように新憲法を求める。しかしながら、彼らは古い体制への憎悪を除いて一切のものに同意しないのである。誰もが独自の万能薬をもっている。利発な人間には団体の規律が不可能である。さらに、フランス人は極度に感受性が強く、気まぐれで、興奮しやすく、感情が激すると全ての思想を常軌を逸したような極端な論理に化してしまう。明らかに、そのような国民は強力な行政の力によって自らから保護されねばならない。彼らが平静に、また愚かになるにつれて、徐々により大きな自由と政治的責任を望むことが出来るのである。

それゆえに、愚鈍さは自治にとって必要不可欠である。

われわれが侮辱的に愚鈍と呼ぶものは、一般社会では活気を添える特質ではないが、行動の安定性と意見の首尾一貫性を保つための、自然の女神のお気に入りの方便である。それは集中力を強化する。ゆっくりと学ぶ者は、学ばねばならない事柄のみを学ぶものである。人々がその義務を果たすための最高の安全策は、他にすべきことを知るべきでないということである。意見の堅固さに対する最高の安全策は、人々が反対意見を理解出来ないようにすべきであるということである⁸⁾。

.....

私が適切なる愚鈍さと呼ぶものは、……その才能豊かな持ち主を主に彼の抱く古い思想に縛りつける。彼が新しい思想の一片を理解するには、7週間かかる。それは新しい諸理論に彼が染まるのを阻止する——何故なら、彼をこれほど退屈させるものは他にないからである。それは彼を昔から従事しているもの、よく知られた習慣、信頼に足る手段、立証された結論、伝統的信念にとどめておくのである⁸⁾。

思想に対するバジヨットの態度の一つの重要な面は、彼の愚鈍さの概念に要訳され、そのために私は彼がその言葉に与えている意味を少し探究したいと思う。「適切な判断を『幅広く、遠回しな常識』と呼び、理性的な忍耐を『愚鈍さ』と呼ぶことは、明らかに風変わりなことである。』⁹⁾とウッドロー・ウィルソンは述べている。ウィルソン大統領の評言は、愚鈍であることの明確な重要性

について多くのことを巧みに説明している。バジョットは幾たびか、例えば、サー・ロバート・ピールへの賛辞を「これほど鈍重な人間がかつて存在したであろうか」と叫ぶことで口火を切り、「健全な常識の点において、彼に及ぶ者がいようか」¹⁰⁾としめくくるときのように、実際のところはその言葉を『常識』という言葉でほぼ代替できるように使用しているのである。愚鈍さの道徳的含意は、恐らくかなり不適切ではあろうが、『理性的忍耐』によって要訳されるであろう。バジョットはバークと同様に、知性と道徳的直観との対立点を示す傾向があった。単なる知性は伝統を馬鹿げたものに、良心を偏見へと分析してしまう。両作家は共に合理的探究は古来の制度の道徳的壮大さを破壊するとも感じていた。バジョットは『イギリス憲政論』の中で国王はもしその憲法上の弱さが一般に理解されたら、国内における昔からの威信と倫理的力の多くを失うであろうという点を強調している。

愚鈍さの概念は単に常識および道徳性と同一視されるだけではない。それはまたある種の思想に対する反対をも表明している。これらのうちで最初のものは、言うまでもなく軽率で抽象的な論理の演繹法であって、バジョットはバークと同じく心からそれを嫌悪している。「クーデターに関する書簡」の中で、形而上学的演繹法は何度かフランス人の利発さに結びつけられ、科学的帰納法はイギリス人の愚鈍さに結びつけられている。サー・レスリー・スティーヴンの解釈は、それゆえに部分的には正しい——「理論は明白な実際の応用によって真偽を確かめられるべきであるという暗黙の要求を含んでいる限りにおいては、『愚鈍さ』は非常に貴重である」¹¹⁾。しかし、バジョットはその異議申し立てを誤謬と詭弁に限定しているのではない。私がすでに暗示してきたように、彼は根本的原理を詮索することを嫌う、イギリス人らしい特性をもっている。ロバート・ロウ氏は大蔵大臣に全面的にふさわしいわけではなく、彼はコールドウェル氏のように、鈍重であることの技量において『卓越した名人』ではなかった」とバジョットは信じていた。

〔ロウ氏は〕才気煥発であらざるを得ない人物である。彼の精神の特徴は、あらゆるものを最も生き生きとして、刺激に富み、驚嘆すべき形式におさめることであ

る。人々が耳を傾けることもなく、眠りに誘い込まれるが……彼らが『正しい』と思うような、あの単調な退屈話は彼には出来ない。ロウ氏は常に最も広範な概論へと登りつめ、論理学者が呼ぶところの *axiomata media*, すなわち中庸の原理は、多くの人々がそこに最も強く現実を感じ、最も安らぐことの出来るものであるが、彼にとっては何の魅力ももたないのである¹²⁾。

明らかに、バジヨットは概括的原理をそれらが事実からかけ離れているからというだけでなく、それらが刺激的であるという理由で嫌悪している。事実、彼は大衆政治にとって思想を刺激と結びつける習慣ほど危険なものはないと考えているように思われる。革命運動の歴史をいやしくも読んだことのある者は誰一人として彼の意見にすぐさま不賛成の意を表すことは出来ないものである。大衆が思想に熱狂するようになり、思想に対する審判者として自らの勇気を鼓舞するようになると、彼らは明晰さ、才気、賢さを尊重することを学ぶが、真理を学ぶことはめったにないかもしれない。何故なら、真理は大衆の理解と偏見に常に適合するとは限らないからである。それはしばしば修辞学の技巧の障害となり、常に美的で明瞭にとか、魅力的で心を奪うように表現されるわけではない。だが、誤謬は無限に融通がきく。それ故に、国民は軽率で見かけ倒しの賢さに自己陶醉するよりも、退屈で平凡な常識を眠そうに尊重すべきであるという方がましなのである。雄弁な煽動政治家が賢明であるようにみえるよりも、真の指導者が鈍重な人間であることことを偽わる方が良いのである。

ある種の思想に対するバジヨットの反感は、彼を全ての思想に対する顕著な偏見へと導いた。卓越した才能に対する彼の疑念は、パークの過小評価とサー・ジョージ・コーンウォール・ルイスの過大評価の中にはっきり表われている。そのことはイギリス人の愚鈍さを彼が手ばなしで称賛している点や、真理は平凡で統計的なものであるという彼の理論、退屈な政府が信頼出来る政府であるという、彼の繰り返しなされた主張の中に明白にうかがえる。後年、彼の頑強な反啓蒙主義は彼が科学的方法に熱中することになった点と、その熱中ぶりが生じさせた自由な探究精神とますます矛盾してきたように思われる。しかし、彼の後期の評論、「大蔵大臣、ロウ氏」(“Mr. Lowe as Chancellor of the Exchequer”)

では、彼は明確で一貫した立場をとりえていない。ロウ氏は成功するにはあまりに才気がありすぎると主張しているが、次のように結論づけている——

だが、『卓越した才能をもった人間は常に安全である』という言葉には深い真理がある。それほど幅の広い言葉が文字通り正確に受け取られるということでは勿論なくて、普通の人間を破滅させ、葬るであろうような難局を切り抜け、誤ちを矯正し、災難を乗り越えるのを可能にしてくれる最高の能力には、いわゆる『積立て資金』があるという点である¹³⁾。

「クーデターに関する書簡」からほんの5年のちに書かれた「知的保守主義」(“Intellectual Conservatism”)という評論の中で、「諸問題の政治家流の考察——すなわち事実を賢明に、偏見にとらわれずに考察すること」、「種々の理由に通じ、政治的重要性をもったものは言うに及ばず、現存する諸事情の道徳的根拠に実際に精通すること」¹²⁾を彼は主張している。さらに、後年のより大部の著作、すなわち『自然科学と政治学』や『イギリス憲政論』のような論文には、スティーヴンが述べているように、それ自体、科学的思考への賛辞であり、推奨なのである。

「クーデターに関する書簡」についてはもう二言、三言述べれば充分であろう。その様式は冷笑的で激烈ではあるが、その実質は極度に慎重で保守的である。バジョットは決してフランス人に永遠の専制政治を宣告していたのではなかった。当時、彼らフランス人には完全な自治は時機尚早であると考えていたにすぎなかった。ルイ・ナポレオンの憲法は、忠実に遂行されるとすれば、加減された自由を彼らに提供するであろう、そしてそれは好ましい結果を伴って次第に増大されるであろう。恐らくバジョットの最大の誤ちは、単なる政治的山師(ルイ・ナポレオンのこと:訳註)に信頼を置いた点であろう。しかし、保守的批評家としては当然の判断というほかないであろう。ルイ・ナポレオンは、混乱状態にある国民の中であって一人の力強い人間であった。

「クーデターに関する書簡」と『イギリス憲政論』の間に経過した15年間に、バジョットは新聞・雑誌に数多くの短い政治評論を書いた。これらの多くは永続的な価値をもつものである。当然のことながら、それらの多くは当時の政治

状勢についての直接の研究である。そのうちの二、三のものは歴史に関するものである。バジョットの歴史に対する態度は学者のというより、むしろ政治家のそれである。彼は徹底主義で正確、偏見にとらわれていないが、主として現在を説明し、解明する手段としての過去に関心をもっている。

このような態度で着手された研究のうちで、恐らく最も長く、最も重要なものは、50ページほどの評論、「議会改革論」(“The History of the Unreformed Parliament, and its lessons”)であろう。それは1860年に公表されたが、その年は選挙制度改革が再度、真剣に討議され始めた年であった。その論文は、それ自体は18世紀の政体のいくつかの主要な面の洞察力に富んだ分析であり、7年後に継続されることになったより入念な分析(『イギリス憲政論』をさす：訳註)への興味深い序文である。バジョットは18世紀を好意的にみる、貴族主義的偏見は全く示していない。旧政府はそれに光彩を添えた多くの傑出した指導者達がいちにもかかわらず、後の政府よりも劣っていると彼は感じた。政府がまさに強力であるべき時期に、あまねく広まった腐敗のために政府は弱体化してしまった。何故なら、買収された多数の人間は、意見に対する忠誠心など一かけらもないからである。大臣が勝利をおさめたときは、大多数の人間は安定し、強力であった。大臣が敗退しそうにみえるときには、國務大臣席を最も獲得しそうな対立候補の支持にいそいでまわったのであった。しかしながら、当時の全ての国会議員が墮落していたのではなく、バジョットは未改革の政体は代議政治の一つの重要な機能を少なくとも適切に果していたと主張している。すなわち、それはその国の知的な意見を代表していたのであった。もしそうでなかったら、識見豊かでない者達が投票を許可されていたであろう。一般大衆の感情はそのようなものであったので、彼らはゲルフ党员(the Guelphs; 19世紀の初頭に外国の支配者および反動思想に反対したイタリアの秘密結社員：訳註)と自由よりも、スチュアート王家(the Stuarts, 1603年から Commonwealth 時代 1649-60年を除いて 1714年まで英国を統治：訳註)と専制政治を恐らく選んだであろう。事実、「改革論」が明白に教え説いているのは、選挙制度改革は非常に慎重であらねばならず、数に関して誤謬絶無はありえないこと、そして権力の大部分は最も見識高

い大衆の意見を形成する『富裕で教養豊かな階層』の手に常に委ねられねばならないということである。

「改革論」は政治形態という迷路の背後に、バジョットが権力の実体と本質をいかに知覚しているかの生き生きとした解説でもある。『イギリス憲政論』をかくも偉大な書物にしているのは、若い時期に培われ、長く行使されたこのような才能の成せる業である。

バジョットは過去を読みとるよりも恐らくいっそう明敏に、眼前の現在の情景を読みとったのであろう。彼は世界中の政府について研究したのであった。彼がプロシアの官僚政治とフランスの実験の推移に興味をもったのは当然であったが、アメリカに対しては特別の関心を寄せた。というのは、合衆国はイギリス自身が向かおうとしていた平等主義の代表であったからである。「ランカシャー（イングランド北西部の州で綿業地帯：訳註）は、時として『水で薄められたアメリカ』と呼ばれている。われわれはそれがアメリカであって、水がきわめて少ない地ではないかと思う」¹⁴⁾とバジョットは書いている。明らかに、彼はランカシャーがイギリスという混合物の中で、いっそう重要な要素になりつつあるのではないかとも考えていた。イギリスではすでに参政権が拡大されており、階級区分は薄れつつあった。アメリカにおいては全国的な成年男子選挙権がすでに確立しており、社会的差別も現在よりは少なかったのである。バジョットは平等主義の結末を細心の注意をもって観察した。彼が一度もアメリカを訪れなかったというのは事実である。恐らく、ランカシャーで充分であったのだろう。だが、彼はイギリスで多くのアメリカ人に出会っていたに相違ない。彼は当時のアメリカの最新の動きを敏感にキャッチし、ハミルトン（Hamilton, 1757-1804. 米国の政治家。初代財務長官：訳註）、モリス（Morris, 1752-1816. 政治家。現在の合衆国憲法の最終的草案の起草者：訳註）、マディソン（Madison, 1751-1836. 政治家・第4代大統領：訳註）その他のアメリカの政治評論家の著作を広く読んだ。彼がド・トックヴィル（De Tocqueville, 1805-59. フランスの歴史家・政治家。貴族の生まれで、政治学の古典的名著『アメリカの民主政治』を著わした：訳註）のアメリカの民主主義についてのフランス人らしい分析を研究したという証拠は数多く

残っている。彼が到達した判断は全くの追従というわけではない。彼はワシントン (Washington) を大いに称賛し、アメリカの歴史における貴族的な伝統を崇敬した。アメリカ人の政治好きの国民性に大いに賛辞を呈している。しかし、ジェファーソン流の民主主義（農本主義的民主主義：訳註）には全く関心をみせていない。彼の見解では、大衆を現在の状態で至高のものにすることは、政治全体をそのレベルに下げることである。それは平凡さ、通俗性、無知、情熱を至高のものにすることである。それは政界から有能な人間を追放し、政治を大衆のつかの間の気まぐれ、感情的な討論、不合理な虚栄にさらすことである。アメリカ憲法の賢明なる起草者達は、これらの真理を十分に意識していたが、過激論者達と妥協させられたために、教育と財産のある階級に支配的権力を授けることによってではなく、大統領の間接選挙のような様々の巧妙・複雑な工夫によって大衆政治の危険を避けようとしたのであった。「それらの巧妙な工夫は厄介な諸悪を産み出し、大いなる危険を増幅させた。だが、それらは企図した目的を達成出来なかった——つまり、政治組織を洗練化することも、国民を抑制することも出来なかったのである」¹⁵⁾。

事実、バジヨットはアメリカ憲法の大いなる称賛者ではなかった。彼が「アメリカ憲法論」(“The American Constitution at the Present Crisis”)の中で言明しているように、「古い政府文書の限定された条項は……永遠に未来を規定しうる」¹⁵⁾と考えるのは馬鹿げている。アメリカの歴史と特に南北戦争の大きな危機は、アメリカの憲法が一つの重大な欠陥をもっていることを暴露している。すなわち、イギリス政府の場合のように、行政府と立法府を結合する代わりに、それは両者の間に一つの強力で不必要な障壁を築いているのである。結果として多くの不幸が生じている。イギリスの首相が、下院で大多数を制することが出来ないときには、彼はそれが可能な大臣に譲歩するか、総選挙で有権者に訴えるかのどちらかである。合衆国の大統領が議会で大多数の反対に出会うと、彼は自らは承認していない施策をやむなく実行に移すか、政府を行詰まらせるかのどちらかであろう。アメリカの歴史の最も重要な時期のいくつかにおいて（例えば、南北戦争の終結時に議会がジョンソン大統領 (President Johnson,

1808-75) を弾劾したときのように) 行き詰まりがいくつか生じた。さらに、アメリカ政府はドラマティックではない。つまり、政府はその啓発的機能を適切に果たしていない。そして結果的に大衆は政府に深い関心を抱いていない。イギリスの首相がある重要な議案を提出すると、野党は彼を打ち負かすべくあらゆる努力を傾注する。そこには大切な討論が生じ、大衆の興奮がみられる。もし敗北すれば、首相は辞任する。アメリカでは政府の運命は決して討論に依存していないといってもよい。アメリカの大統領と議員はいかなる行動、発言をしようとも、彼らの任期の終わりまで役職にとどまり、そのために例外的な場合を除いて大衆は選挙の時期まで自らの代表に殆ど注意を払わないのである。間隔を置いた激しい興奮によって変化を添えられてはいるが、無関心の習慣がアメリカ国民につのってゆき、バジョットの見解では、それはアメリカの政治における最も深刻な悪弊の一つになっているのである。

アメリカ政府の第3の大きな欠陥は、政党が大統領候補を選ぶ際の方法から生じている。バジョットの時代には候補者は『幹部会議と呼ばれる予備会議という複雑な機関によって』選ばれていた。そして現代の大会はその修正されたものである¹⁵⁾。この指名方法はバジョットによれば『はなはだ災禍を招く』ものである。

政治の世界で長い間、苦難にさらされてきた全ての政治家は、多くの友人達と疎遠になり、必要な拒否によって多くの候補者をいらいらさせ、多勢の人々の胸をむかむかさせるような多くのことを言わねばならなかったにちがいない。全ての偉大な人間は自己の敵を創造するものである。それゆえに、稀有な最も例外的な場合を除いて、合衆国の大統領には偉大な人物はならないであろう。『大統領の仕掛け人』の目的は、最大多数の歡心を買うような候補者、すなわち味方する点の最も多い人ではなくて、反対する点の最も少ない人物を見つけることである¹⁵⁾。

大統領選挙選で多くの『ダーク・ホース』が勝利を手中にしてきた。多くの『凡庸な支配者』が大統領の椅子に坐ってきた。アメリカ史における恐らく最も悲劇的な時である南北戦争勃発時に、無名の人物がその国の首長であった。アブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln) が偉大な人間であることを証明した

ことを感謝すべきであるような憲法はわれわれにはない。アメリカ人は大統領候補を指名するという唯一の方法のおかげで、著名な政治家達が奉職する機会を奪われてもいない。バジヨットの意見では、閣僚であることは偉大な人物に値しない。権力の独立という不幸な理論に従えば、そのような役人は立法府の一員になれない。彼は議会の経歴がないからである。それゆえに、大ていの場合には彼は以前に政治の経験がないままその地位に任命され、政治的な面での将来は全くない。閣僚で合衆国の大統領になった者は、きわめて少ない。要するに、アメリカ憲法は行政府の偉大な政治家を訓練し、試し、適切に選ぶためのふさわしい機関を全くもたないのである。

疑いもなく、バジヨットのアメリカ批判は大そう説得力のあるものである。未熟で、粗雑、平等主義を唱える、まだ揺籃期の民主主義は、単に彼の根本的思想のいくつかの否定であるだけでなく、彼の目には不快なほどの綺麗事と映った。彼がアメリカ憲法の欠陥から生じた悪弊を誇張して述べているのは確かである。われわれは有能な大統領をもち続けている。むしろ皮肉なことに、彼がアメリカの中にイギリスの未来を洞察していた点は、恐らく彼自身が想像していた以上に、正しくさえあった。何故なら、イギリスの民主主義は社会的な面ばかりでなく、政治的にもアメリカ流になってしまったからである。その基本原理が確実性であるとバジヨットが感じていたように思われるイギリス憲法は、その黄金期以来ますますアメリカ憲法と類似するようになってきた。

国民は国民であるゆえにめったに謙虚にならないということは、現代の愛国心の不幸な特質の一つである。彼らは称賛のみに関心を向け、反論には激しく憤慨することが愛国的義務であると感じている。アメリカではこの敬虔なる憤慨は喜ばしいことに以前ほど激しくなくなった。われわれはバジヨットのアメリカ人批判をそれが手きびしいからといって全く拒否すべきではない。それは確かに全く誤った評価というわけではない。何故なら、その誤ちは虚構の欠点を発見することにあるというよりむしろ、現実の欠点を誇張することにあるからである。バジヨットのアメリカ人批判は、われわれアメリカ人が傾聴すべき種類の批判である。

第12章 原文註

- 1) "Pitt," iv. 3; "Milton," iii. 200.
- 2) Quoted by John MacCunn, *The Political Philosophy of Burke*, p. 6~7.
- 3) "Coup D'Etat," i. 107~8, 98; "Physics and Politics," viii. 6~7, 40.
- 4) MacCunn, p. 13.
- 5) "Reflections on the Revolution in France, and on the Proceedings of certain Societies in London relative to that Event," *The Works of Edmund Burke*, iii. 121, 108.
バークの書名に続くローマ数字は、彼の著作集の Little and Brown 版の巻数を示す。
- 6) viii. 77.
- 7) See p. 190; see pp. 231~2.
- 8) "Coup D'Etat," i. 102, 106.
- 9) "A Wit and a Seer," *The Atlantic Monthly*, lxxxii (October 1898), 532.
- 10) "Coup D'Etat," i. 101.
- 11) "Walter Bagehot," *Studies of a Biographer*, iii. 171.
- 12) "Mr. Lowe as Chancellor of the Exchequer," v. 113, "Dull Goveernment," ix. 239~43; "Average Government," ix. 244~9.
- 13) "Mr. Lowe as Chancellor of the Exchequer," v. 115; ix. 257; iii. 271.
- 14) "Mr. Gladstone," iii. 276.
- 15) "The American Constitution at the Present Crisis," iii. 384, 350, 376~7.